

秘密の道しるべ

中村 龍介

爽やかな季節を迎えた。私は秋が一番好きだ。この時季、天気の良い朝は空気が澄んでいて、遠くまで見渡せる。七階にある我が家のリビングからは悠久の多摩川が一望できる。特に、出窓から眺める川の流れは素晴らしい。少し大袈裟に言えば『美しく青き多摩川』だ。

その出窓の両側の壁には五号ほどの水彩画が架かっている。どちらも同じ画家の作品だ。『秘密の道しるべ』とタイトルがついた右側の絵は昨年十月、日本橋で開催されていた個展で買い求めたもの。

絵に描かれた花は『ホタルブクロ』だが、道端で見かけるピンク色の花と違って、花は二重で、白い花卉。『白花二重咲きホタルブクロ』と言うらしい。

また、この絵は透明水彩画という技法を使って描かれている。これは学校で習う不透明水彩画とは用いる絵の具が異なる。使われる絵の具の色は両方とも同じ『顔料』だが、粉状の顔料を紙に定着させるための『展色剤』が異なる。細かい話は省略するが、透明水彩画の特徴は何といっても、絵に引き込まれそうになる透明感だろう。

その透明感は何処から来るのか。私の素人判断からは、主に二つの技法がキーとなっているように思われる。

ひとつは、『ウェット・イン・ウェット』と呼ばれるボカシ技法。画用紙が濡れている間に色を塗ることで、色のグラデーションが軟らかなタッチで表現される。もうひとつは、『白』を表現するのに、白の絵の具を使わずに紙の白さを前面に出す、透明水彩画に独特の技法。これによって、『白』が不思議な色調で強調される。

『秘密の道しるべ』では、ボカシ技法を使った背景に、紙の白で表現された花卉が浮き上がって見え、全体として非常に柔らかな透明感を出している。

この絵の作者、Wさんは大学の後輩に当たる。彼女は、大学では中国語を専攻した。勤務先で少し中国語を使う仕事に従事したが、結婚により退社。

その後、御主人の米国赴任に帯同してNY州ロチェスターに渡り、生活は一変する。ある日、全く偶然にも運命を変える一枚の絵に出逢うことになる。その時の様子を彼女は語る。

「歯の詰め物が取れたので近くの歯医者に行きました。日本では簡単に済む治療なのに、アメリカでのやり方は大げさで、苦痛を伴いました。治療が終わり、診療椅子が起こされた時、目の前に掛けてあった一枚の絵が目飛び込んで来ました。治療前にはそこにあることにも気付かなかった絵でしたが、色彩の美しさが心の中にまで染み込んでくるようで、治療の苦痛もすくっと



和らぎ、とても不思議な感覚でした」

「百合の花の絵でした。何とも言えない透明感や柔らかくもメリハリのある色彩。それまで見たこともない画風の水彩画でした。瑞々しい画面に釘付けになっているうち、ひととき輝きを放っている花卉の部分は、塗り残された紙の白であることに気付きました」

一枚の百合の絵が彼女の頭から離れず、ロチェスター市の専門学校に入学して、透明水彩画の初歩から学ぶこととなる。

幼い頃から絵が好きだったという彼女の天賦の才は短期間で花開く。米国で透画水彩画の基礎をマスターした彼女は、帰国後、著名な画家に師事して更に腕を磨き、独自の画風を確立する。

Wさんの絵の魅力は、軽やかなタッチとハイセンスな色遣いにある。絵のテーマは静物、風景、人物と多岐にわたるが、どれも絵の中に物語があり、詩がある。また、タイトルのネーミングにも工夫がみられ、面白い。

『秘密の道しるべ』は、テーマの『ホテルブクロ』から『蛍の寝るところ』を連想し、色々と想像を巡らせているうちに思いついたという。

私も、この絵とタイトルをヒントに、想像の翼を拡げて、楽しいメルヘン小説でも書いてみたい誘惑に駆られる。

【二〇一五年十月記 原稿用紙四・五枚 課題「絵」】